

「秋田大学みらい創造基金学生海外派遣支援事業」帰国報告書

記入日：2022年9月28日

所属：教育文化学部 学校教育課程 教育実践コース 4年

氏名：渡部結希

派遣先大学名（国）カナダ メモリアル大学

在籍身分：留学

派遣期間：2021年9月～2022年8月 約1年間

渡航年月日：2021年9月7日

帰国年月日：2022年8月22日

○派遣先大学における授業等の履修状況

履修した講義名	講義の履修期間	週あたりの講義時間
Intro to Linguistics	秋学期(2021年9月～12月)	2時間30分
Communication and Culture	秋学期	2時間30分
Syntax	秋学期	2時間30分
The wonder of words	秋学期	2時間30分
Holism of Anthropology	冬学期(2022年1月～4月)	2時間30分
Semantics	冬学期	2時間30分
Philosophy: Logic	冬学期	2時間30分
Intro to Business	春学期(2022年4月～8月)	2時間30分
Being an entrepreneur	春学期	2時間30分

○研究・学習概要及び今後の勉学計画

「コミュニケーションを追求する」ことを目的に、言語学、文化人類論、実用性が高いビジネス、主に3つの分野、そしてカナダでの生活を通して、コミュニケーションを研究しました。言語学はたくさんの分野がありますが、英語学の中の語用論、意味論、コミュニケーション論の3つに絞り、学修しました。

秋田大学で英語教育学を学ぶうちに、キーワードとしてよく取り上げられるようになったことがきっかけで、興味を持ったコミュニケーション。留学期間1年間で思い切り、コミュニケーションを追求することを言及し続けましたが、一生を懸けて研究し続けたとしても、研究しきれないと感じます。私たちが当たり前のように行っていることを意識的に、多角的に研究することの難しさを実感するとともに、コミュニケーションのもつ表現の豊かさ、無限の可能性に真正面から向かい合うこと、心が躍ります。留学前はコミュニケーションは「意味の取り合い」と考えておりました。今の

私がコミュニケーションを定義するとすれば、Paul Griceの「意図の取り合い」です。「意図の探り合い」とも言えるでしょうか。そもそも、コミュニケーションへ最大の影響を施している言語は時代を超えて日々変化し続けており、コミュニケーションの定義も一人一人が違い、その定義も変化します。同じ言語、例えば英語話者でも、その人の背景や経験によって意図の伝え方、汲み取り方は異なります。多国籍文化であるカナダで、50カ国以上の人々と英語でコミュニケーションをし、その多様性に感動しました。卒業論文では、そのコミュニケーションの意図の取り合いに着目し、人の考えがどのように意図を通して伝えられているか、人がもつ人間性はどのようにそのプロセスに関連しているのかを研究してまいります。

○生活面について

秋学期は大学の寮、冬学期、春学期、長期期間中はシェアハウスでそれぞれのルームメイトと暮らしました。Newfoundlandに8ヶ月、Montrealに1ヶ月、Torontoに3ヶ月間滞在しました。MontrealとTorontoに居たときは、大学の講義はオンラインで学修し、Torontoではインターンシップへ挑戦しました。たくさんの背景をもつ人々と関わってきて、文化は国や地域で分けられた固定的な部分と、一人一人がもつ、変動的な文化があると感じました。周りの友達、家族に支えられ、大きな問題なく、快適にカナダで生活することができました。

○その他留学全般にわたる感想

留学前は「環境を変えなければ、自分は成長しない」と思い込んでおりました。留学を通して、どの環境や状況にいても、自分自身の中にある向上心や探究心を導こうとすれば、成長できると実感しました。また、この留学がきっかけになり、新たな目標をたくさん見つけることができました。その目標を達成することに力を入れるのではなく、達成までのプロセスの充実に関心を置き、これらも勉学・研究へ励んでまいります。

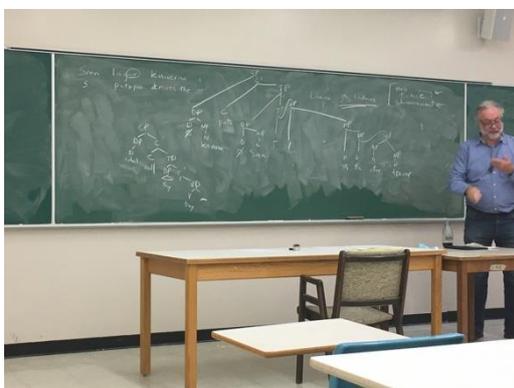


写真1: Syntaxの授業の様子



写真2: メモリアル大学外観

○渡航費補助について

新型コロナウイルスの影響が懸念される中、十分な準備をする時間も無く突然の留学であったにもかかわらず、快く渡航費を補助していただきました。経済的な余裕が十分に無い中、この渡航費補助によって留学を開始することができ、自分の人生を大きく変える、様々な学び、発見、成長を掴み取ることができました。本当に感謝しております。ありがとうございました。